

神奈川

市民参加で策定された「おだわら千年蔵構想」に基づく小田原の街歩きが、中心市街地再生の取り組みとして再び注目されている。拠点として設けられた「小田原宿なりわい交流館」は、今年9月に開館15周年を迎える。老舗や工房を博物館に見立てた「街かど博物館」は1月に20館目が認定され、ファンクラブには400人以上が登録。梅干し、かまぼこ、干物など城下町・宿場町の時代から連続と続く「なりわい」が、市内外から顧客を引き寄せ、街のにぎわい創出に貢献している。

千年蔵構想とは、街全体を「なりわい」の要素（もの、人、店、自然）を納める「蔵」になぞらえて、1,000年間にたまったほこりを払い、虫干しをして、再び「交流の場」に生まれ変わらせようというもの。小田原市政策総合研究所が2001年に提案し、市民の意見を取り入れて翌年に構想を策定した。02年の日本計画行政学会・計画賞を受賞している。構想実現へ向けて、市と市民とを結ぶ組織として「特定非営利活動法人小田原まちづくり応援団」（通称・まちえん）も03年に設立された。

なりわい交流館（小田原市本町）の前身は1932年に建設された旧網問屋で、小田原の商家の代表的な構造である「出桁造り^{だしげた}」が用いられている。出桁造りとは、柱の上に載せた太い桁を建物の前面に何本も突き出し、そこに軒や屋根を載せたものだ。2階正面は出格子窓になっていて、昔の旅籠の雰囲気を漂わせているのも面白い。市が2001年に再整備し、無料休憩所やイベントスペースとして開放。年中無休で、職員が常駐し、湯茶の接待や街かど博物館に関する情報提供などを行っている。

街かど博物館の認定は1998年、市の事業としてスタート。第一弾は「梅万資料館」（欄干橋ちん里う）、「菓子どころ小田原工芸菓子館」（栄町松坂屋）、「かまぼこ伝統館」（丸う田代）の3館だった。その後、干物づくりが体験できる「ひもの工房」（早瀬幸八商店）、寄木細工を展示販売する「寄木ギャラリー」（露木木工所）などが加わり、認



街歩きの拠点となっている「小田原宿なりわい交流館」

街歩きが 中心市街地再生に貢献

定も館長連絡協議会に移管された。20館目は「小田原駅前梅干博物館」（ちん里う本店）で、巨大な漬け樽、天保年間製造の梅干しなどが展示されている。

市は「街かど博物館ガイドマップ」（A4判、縦2つ折り、36ページ）を作成し、なりわい交流館や小田原駅前の観光案内所で配布。館長連絡協議会とタイアップしてスタンプラリー（通年）を開催するなど、PR活動に力を入れている。

一方、明治時代以降に伊藤博文、山形有朋、北原白秋らが住んだ小田原市の旧十字町では、地元「お城南通り商店会」が昨年10月、青果店の空き店舗を利用して交流拠点「十字町ヒストリア」を開設した。これら著名人の写真や住居のあった場所を印した手製地図などを常設展示するほか、3カ月ごとにテーマを変えて小田原の鉄道史や災害記録などを展示している。土・日曜のみの開館で、入館無料。同商店会は「市民や観光客に気軽に立ち寄ってもらい、商店街活性化の一助としたい」と話している。